

市街地模型を活用した 次世代への防災伝承

岩手県陸前高田市 一般社団法人トナリノ（連携団体：神戸大学槻橋研究室）

一般社団法人トナリノでは「地域の相棒」として、主に過疎地域の住民から困りごとの相談を受け、計画から現場までの伴走支援を提供しています。2011年3月11日に発生した東日本大震災によって、壊滅的な津波被害を受けた岩手県陸前高田市のボランティアをきっかけに同市出身者が設立し、震災直後は避難所運営や物資支援や情報発信等の緊急支援を行っていました。その経験を生かした活動の1つとして「市街地模型を活用した次世代への防災伝承」を行っています。

一般社団法人トナリノの主な活動地域である陸前高田市には課題がありました。陸前高田市は岩手県での東日本大震災の犠牲者が最大であったにも関わらず、少子高齢化も影響

して「震災の記憶や教訓の風化」が進んでいました。陸前高田市の2022年の人口は18,262人と2011年と比較して6,000人が減少しており、若年層（20～39歳）においては全体の10%しかいません。（※陸前高田市ホームページ 令和2年国勢調査を参照）これらから震災の記憶や伝承がどんどん薄れていく危険性を感じ、震災特需の陰りに伴って、交流人口及び関係人口の減少が顕著になっていました。

一方で、陸前高田市では2013年9月に神戸大学槻橋研究室が中心となって取り組んでいる「失われた街」模型復元プロジェクト」の市街地模型展示会のワークショップが開催されていました。このプロジェクトの目的は、東日本大震災前の町や村を500分の1



市街地模型展示会で場所を説明している様子（大船渡市のサンリアにて）





市街地模型展示会にて地元住民と色塗りをしている様子
(大船渡市の公民館にて)



市街地模型の拡大図 (旗や家の模型)

の縮尺で復元し、地域で育まれてきた街並みや環境、人々の暮らしの中で紡がれてきた記憶を保存・継承していくことです。このプロジェクトで作られた復元模型は震災前の街並みと、津波での浸水区域が一見して分かる唯一のコンテンツです。模型の展示会では、参加した地元住民と運営スタッフが一緒に街の記憶や思い出を振り返りながら、建物の色を塗ったり、旗のピンをさしたりしていきます。ほとんどの被災者が様々な形で被災をし、心的外傷のレベルが異なることから、震災前や当時の記憶に改めて触れる機会を作りづらい状況がありました。しかしこのプロジェクトの活動によって被災者と一緒に懐かしむことで、自然と震災当時や街並みの記憶を語り継ぐことができたのです。

復元模型は建築学生によるボランティアを中心に制作していて、陸前高田市を含む近隣地域の市街地模型を長期的な視野でどう保存・活用していくか悩んでいました。一般社団法人トナリノの代表、佐々木信秋がこのプロジェクトを組み合わせれば陸前高田市の課題解決にもつながると考え、一般社団法人トナリノで市街地模型を譲り受け、この活動を引き継いで実施することとなりました。

一般社団法人トナリノが主体となり、2019年～2022年にかけて陸前高田市

を中心に近隣地域を含めて5地域で市街地模型展示会を開催しました。開催と同時に全国への情報発信にも取り組みました。地元住民へは新聞への掲載やチラシを配布して周知し、展示会に足を運ばない全国や世界の人には市街地模型の様子などが掲載されている「けせん震災と昔の記憶」サイトを作成して発信しました。展示会以外の取り組みとしては、地域の歴史や魅力について語る高齢者との交流会「今昔せんがたり会」や、陸前高田市の人々や地域の魅力を記事にした「たかたる」という冊子、市街地模型展示会での思い出や記憶の言葉を記載した「つぶやき」BOOK等を制作しました。

運営には学生や移住者等の若年層が参画をすることで、世代間交流や次世代への伝承と愛着促進といった幅広い効果につながりました。参加者からは「どんどん風景が変わると記憶も薄れるので、こういった模型があると懐かしく、大変に嬉しい」「住んでいるところがばらばらになったが、参加することで久々に会えた人がたくさんいた」「是非、まだない地域の模型を増設して欲しい」等の声を多く頂き、たくさんの方の応援と賛同を得ました。

しかし市街地模型展示会を実施していく中で新たな課題も見つかりました。展示会に参加することで災害を知ることにはつながりますが、いざ自分自身が災害にあったらどう行



市街地模型ガイドの前半の語り部の様子
(陸前高田グローバルキャンパスにて)

動するかにはつながりづらかったのです。
防災意識を持つためにどうするか検討した結果、展示会は2022年度で終了し、2023年度からは常設展示にして、「いのちのイメトレ」活動にて活用しています。「いのちのイメトレ」では3つの取り組みを行っています。
1つ目は「市街地模型ガイド」の実施です。ガイドの前半は市街地模型を活用して、語り部が被災地の教訓と地域の魅力を語り、後半は災害時の状況を自分自身の問題として



市街地模型ガイド後半のワークショップの様子
(陸前高田グローバルキャンパスにて)

イメージするトレーニングツールを活用し、ワークシヨップを行います。東日本大震災での出来事を知るだけでなく、自分の身に災害が襲い掛かったときにどう行動するのか考えることで、災害を自分ごととして捉えてもらいます。
2つ目は学生を中心とした「若年層の語り部」の育成です。2024年の現在は10名を育成しており、どの方も共通して地元へ貢献したい心を強く持っています。育成内容は勉強会や事例視察、語り部キホン研修会等を実施し、語り部としての基礎知識を学んでいます。



若年層の語り部の勉強会の様子 (陸前高田グローバルキャンパスにて)

3つ目は、市街地模型を活用して陸前高田市内の学校を対象に行う「防災授業」の企画と実施です。学生たちが市街地模型に触れる機会を増やし、かつ、学生の語り部から話を聞くことで、参加者が語り部の活動に関心を寄せるきっかけになればと考えています。一般社団法人トナリノでは、今後この3つの取り組みを実施することで、「震災の記憶や教訓の風化」を防止し、「次世代の地域への愛着促進」をより強くしていけたらと思っています。
(一般社団法人トナリノ広報 佐々木彩花)